



あのときの常呂・写真館

VOL 193

(1974年)

昭和49年5月14日 藤山ハルさんに木杯授与

▶ 樺太アイヌの文化伝承者だった藤山ハルさんは、明治33年、樺太西海岸恵須取〈エストリ〉で生まれ、昭和23年に千歳丸で函館に引き揚げ、昭和28年に長女フサさんが住む常呂郡常呂町栄町（現北進町）で暮らし始めます。●昭和30年8月18日、東京大学服部四郎教授がアイヌ語調査のため初来町し、藤山ハルさんと運命的な巡り会いをします。司馬遼太郎／著『街道をゆく三十八 オホーツク街道』には、「…服部博士は、以後19年間、年平均に一度は常呂にきて彼女を訪ね、その言葉を調査した。〈藤山さんは国宝的存在です〉…」 「…服部博士はハルさんに対して、肉親同然につくした。ハルさんが語り疲れてくると、肩をもんであげたという。そのもみ方は玄人はだし…」と綴っています。●昭和39年、服部四郎代表編集者『アイヌ語方言辞典』（岩波書店）が発行されますが、この辞典の樺太方言は、すべて藤山ハルさんの言葉であり、藤山ハルさんがいかに樺太アイヌの言語に優れていたかを示すもので、服部四郎氏と藤山ハルさんとの関係の深さが分かります。



●藤山ハルさんは、昭和49年3月19日、2人の娘（金谷フサさん、白川八重子さん）と服部四郎氏に看取られ永眠。5月14日に木杯伝達がありますが、木杯授与に関して、「広報ところ」は、「…数少ないアイヌ文化の伝承者として民俗学会や言語学会から〈人間国宝的存在〉と大切にされた故藤山ハルさんに国から天皇陛下の木杯が贈られ…木杯は、網走教育局長からハルさんの長女、金谷フサさんに伝達され」たこととその功績を伝えています。 ＊写真：左は、木杯を受ける金谷フサさんと藤山ハルさんの遺影

右は木杯（常呂町埋蔵文化財センターで保存）

※次ページからは、藤山ハルさんの功績をさまざまな資料から引用して紹介

●この木杯授与の3年前、昭和46年11月には常呂町文化功労賞を受賞しています。受賞の推せん文には「樺太アイヌ文化の伝承者で、特に樺太アイヌ語にかけては天才であり、その資料により『アイヌ語方言辞典』が出版…。本年3月、東京国立劇場において樺太アイヌ伝統芸能儀式の披露を行い…言語学・民俗学・文化人類学上もっとも貴重な存在で学術的にも価値が高く、本町にとって非常に名誉なこと…」とあり、樺太アイヌ文化の伝道者という側面にも触れています。●このことに関して、大西信武『常呂遺跡の発見』（講談社：昭和47年11月発行）には、〈藤山ハルさんのこと〉という章で、「…ただ頭がいいばかりでなく、万事に冴えている。歌も踊りも話もうまいし、いっぱい生活の技を持っている。何だってその器用な手でさばく。モウル（肌着）などの作りはいうまでもなく、手甲やサバンテなどの刺しゅうも実に他の者がまねられないくらいの技術を持っている。そして、ウタラバケ（族長）かコタンコルクル（村長）の家系にあった人らしく、シントコや玉や杯などの古いアイヌの作った宝物を大事に持っているニシパ（物持ち）の一人でもある」と称賛しています。●また、昭和51年12月に発行した『カラフト・アイヌ語』（国書刊行会）の著者／村崎恭子さん（東京外語大助教授）は、藤山ハルさんの許へ通い、14年間という長い期間の調査研究成果で昭和53年5月に第5回金田一京助博士賞を受賞しますが、常呂町文化連盟機関紙「新墾（にいばり）」第14号には、〈金田一賞を受けて 藤山ハルさんのこと〉という文を寄せ、「私の研究はすべてアイヌ語カラフトライチシカ方言のすばらしい話し手、藤山ハルさんの功績」とし、藤山ハルさんを発見し、紹介してくれた服部四郎氏への謝意、そして「今は亡きハルさんの力がどんなに大であったか、皆さんにわかっていたきたい」と藤山ハルさんの知識の豊富さ、正確さ、優しさを伝えています。



賞状とリボン、右隣にトンコリ



正装姿の藤山ハルさん

●服部四郎氏は昭和58年に文化勲章を受章し、陪食の席で、藤山ハルさんを調査したカラフトアイヌ語のことを天皇陛下に話題にしたことを「陛下と琉球方言」（『昭和の民のこころ…天皇陛下に捧げる各界奉祝の声』所収、服部四郎『一言語学者の随想』汲古書院にも同文所収）という一文に次のように書いています。「…文化勲章を戴いた折、受彰者や文化功労者の方々とで陪食の栄を賜りましたが、私は比較のお近くの席を与えられましたので、カラフト西海岸北部から引き揚げたアイヌのお婆さん（註：藤山ハルさんのこと）の言葉を調査した時のことを申し上げ、北斗七星や天の河を知らないのに驚いたことをお話…。服部四郎氏が藤山ハルさんとの調査の日々を後年まで大切にしていたエピソードです。



＊上2枚：昭和38年9月19日開催の「ところイソヤンケまつり」（中央公民館）常呂町開基80周年記念事業の一環として実施。樺太アイヌの歌や踊りを常呂町民対象に披露した最初のお機。 「イソヤンケ」とは、海の幸を陸に持ってくる神さまの意。「ところイソヤンケまつり」解説パンフレットには、当日演奏・踊った曲を藤山ハルさんの言い伝えとして紹介。



＊上：昭和37年 樺太アイヌ舞踊の取材を受けての踊り
場所は現在の北進町裏手のオホーツク海海岸
トンコリを弾いているのが藤山ハルさん

＊昭和46年の常呂町文化功労賞受賞の写真
左：賞状・記念品
右：記念のメダル



＊藤山ハルさんの詳細は、常呂図書館作成の「樺太アイヌの文化伝承者：藤山ハルさん、金谷フサさん、金谷栄二郎さんのあゆみと功績を知るための年表」（HPで公開）をご覧ください。